



高野の春情



思ふとちとほる、よりもうれしきハ朝夕ききく鶯のまゝ 近衛忠熙  
 われたれと隣のわら屋梅咲けハ住代りてもまはしき哉 福羽美静  
 さえのへり又も水の關にゑてはるをへたつる白川のミツ 黒川真頼  
 宮人のくむ玉もひの若水にはるの色ふそまつうのひげれ 幸嶋常敏  
 向ひたく烟とこれハ灘波濁るにわたりて春雨のふる 雜賀光香  
 子日すと打出てこれハ霞さへ細引わたるのへのまつはら 坪井朝風  
 うめの花にはふと見つゝ鶯れなくやうましき心な類らん 佐々木知足  
 初日影まよへる方を見渡せハ打靡きたる日のはたのち 岡澤英義  
 玉たれのと波の隙もる春風ハ庭の梅の香しるくそあり鬼 吉小神 仁  
 四方うのミ波も一つの治まりて千里も同じ春風のふく 渡邊市太郎  
 此あさけ立出て見れはうらゝと霞渡れる信太の浮嶋 渡邊忠三郎  
 とふ人もなき我宿にぬはたまのやまにもふもふ梅の下風 板橋 善  
 山のはに村立まつ梢のミ見えてふもどはるにむ頃るか 板橋貞輔  
 新らしき年の初の大空にちよはふあるふつのもろはる 池田美復  
 春雨のふるたひまどに若草のミどりいろそふ萩のやげ原 小更國光  
 いもとせとふたかミたてる筑波山あはれへたつる春霞哉 野口一光  
 芹川や若菜つむへく雪きえて千代の古道あらはれにけり 瀬理光之  
 春日野の雪あきわけてけふも又若か摘子の袖のをしき 荒木光重  
 来て見れハ若菜ハはやも萌出てつめハ袂に餘るうれしき 佐々木知禮  
 初日影まはへる梅にうくひの鳴音のとけき此あさけ哉 飯田知代  
 鶯の聲きまもありいつしうと野山のまのめはるや立らん 永長富久美  
 かつのまに春はきぬらんけさこれハ霞の衣纏はぬハかゝ 小林仲子  
 唐崎の松のミどりも見えわりの霞たかひく春はきにけり 大久保定子  
 昨日までふゝミ梅の今朝はハや開きて匂ふ春はきに鬼 青柳信太郎  
 うちかひく柳の糸に引れてやけふも又来てうくひの鳴 大野梅溪  
 ゆふ花の榮ゆるミよに逢ひぬれば樂しきものを春を迎る 鳴田 取  
 風さむミ雪も氷もとけゆくに春をせつくるうくひすの聲 朝日いせ子  
 面影のまゝちまそはれはのゝと霞ミわたれる嶺の松原 山中恵治  
 そのふ皆春の匂ひにあすものハたゝひと本の室の梅の香 内藤知智  
 さちゝし春や来ぬらひ鶯のふるにを出る 聲聞ゆ あり 小關文雄  
 老らくも野邊の淡雪のき分て子らと共にや若菜つまゝし 吉小神光正  
 わたの原霞を見ればあま衣浦のとまやも春はきにけり 土肥知源  
 見渡せハ霞ハふらくたちちあめて楫の音たうし信太の浮嶋 小倉知信  
 外國にミくもミても春のよの月ハ臆にうをむかりけり 關川正澄  
 やまのはの氷も今ハ解にけりあすハ野澤の根芽つまゝし 立原常足  
 窓あけて月まつほとの手枕に匂ひえからぬ軒のうめの香 岡部誠香  
 降雪をうちはらひつゝ春日野にひとり若菜を摘人やたれ 流球人三司官  
 拂つゝ摘と若菜ハ手にミたてたまるハ袖のミ雪かりけり 英國人  
 鶯のねくらあゝらの初聲にさめてうれしき春のゆめ 宜野朝保  
 けふくゝとまつまも遠き櫻花かゝひの外に香に匂ひ鬼 チャンパレン王堂

みしめ繩春立空はうらゝと神代より社のとけりけり 佐々木知仁

春ハまた淺間のたけみ立霞きのふの色にまさまさりけり 小倉知義

鶯のさく聲きしめしたよりはしめて春の心地をすれ 朝日商豆

